



雛祭を待ちつゝ、

永代美知代

「もう幾つ寝たらお正月。」

それと同じやうに、いゝえそれよりも、もつとく
樂しみな心持ちで待たれるものは、少女時代の雛祭
でございます。

東京ではチャンと新暦三月三日と定まつてゐます
が、何しろ雪國の私の田舎では、新暦の三月と云へ
ば桃は愚か、梅さへもまたつばみが堅くて、何事に
も舊習を重んじ勝ちな土地の人達は、大抵普通に
舊暦で上巳の節句を祝ひました。

ですけれど私の家では、父も母も新しい好きな
人でしたから、世間並に舊暦のお節句もしてはくれ

ましたが、別に又、丁度一月後の四月三日に、私
の家だけ別に雛祭をする事になつてゐました。

その日は幸神武天皇祭でもあり、僅か一月の相
違ひではありますが、陽氣がすつかり暖かになつて、
梅も咲き、桃も櫻も柳もみんな一時にめぐんで参り
ます。野には若草が芽えて、つい野端れの田圃まで
出かけると、つくしや嫁菜や餅草が、紫の菫、紅い
げんげの間々に面白いくらいと生えてゐます。

母は毎年その日に、巻壽司だの口取だの、子供の
好きさうな御馳走を作つて、仲よしの誰彼を招いて、
一緒に近くの野原へつみ草に出掛けてくれました。

三月の末になると、學校の方の試験はすみませすし、私達はたゞもう四月三日の雛祭が待たれて堪りません。

「もうお雛様お飾りなすつて？」
「今年もつみ草にいらつしやる？」
友達は私一人を取り巻いて、口々に斯うした事を云ひ合ひました。

試験さへ済みますと、母は毎年お倉の二階の長持を開けて、床の間一杯の雛段を組み建てたり、菓子屋を呼んで雛菓子の用意をさせたりして呉れるのが例でした。

「自家へいらつしやいな、まゝ事して遊びませう。」
私は来る日も来る日もお友達を誘つて、雛段の前で終日遊びました。ですが、私が九歳か十歳の時でした。母は雛祭が間ぎはに迫るまで、いつものやうに雛様を出して呉れもせず、うるさくせつく私を叱つて云ひました。

「伯母様が御病氣だのに、そんな事をしてゐて、おはともすれば戶外へ出勝ちであります。

「嫁様ごつこをしませうよ。」と誘はれるまゝに、私は弟をつれて友達の家へ行きました。

幾戸前かのお倉とお倉の建ち並んだ其お倉の前の石段々に蕙やげんげで作つた御馳走の數々を並べたり、小石でついた餅草のあんころを丸めて、お向ひのお家へ進物にしたり、母様になつた私が、弟の子供に着物をさせたり脱がせたり、私達は夢中になつて、夜が明けた、日が暮れたと、



「おヤ、××様のお嬢様！」
突然に頓狂な聲に呼立てられて振向きますと、其處の家のお女中が呆れ顔に私を見詰めて居りました。

「早くお歸りなさいまし、お宅ではあなたの方お二人が見えないので大騒ぎです、山の方へ人を出して探させたりなすつてゐますよ。」

「だつて私は先刻から此處に居たんだわ。」

「自家へも訊きにいらつしたのですけど、まさか此處にいらつしやうとは氣がつかせませんでしたし」

前は雛様さへ飾れば好いとお思ひなのかい。」
伯母様と云ふのは同じ町にある親類の、母のためには嫂に當る人でした。永い間もう何年越しの病人なので、子供心には別段それが大した事で、一年一度の雛様まで遠慮しなくてはならぬものとは思はれませんでした。切角お試験も済んで、學校も休みだのに、雛様は出して貰はれず、おまけに母様は朝から晩まで伯母様の方へばかり行き切りで、私はもうつまらなくて堪りません。女中達もみんな忙しさうにして居て、誰一人私にかまつて呉れさうな者はありませんでした。

仕方なしに私は、平常のおもちやで姉様遊びでもする外ありませんでした。おまけに私とは四つ違ひの弟まで押しつけられて、仲よく遊ばねばなりません。

「戶外へ行かないでね、仲よくなさいよ。」
母様は呉々もお云ひつけになりました。併し家に居て姉様で遊ばば、亂暴やの弟にこわされるし、私

幾時間かを其處に遊んで居りました。

た。兎に角早くお歸んなさいまし。」
私は屹驚して、周章で、弟の着物の紐を締め直す
やら、あたふた家へ歸つて来ました。御門を入ると
一番に眞著なお顔の母様が眼につきました。母様は
玄關の敷臺に立つてうろく、氣が氣でないと言つ
た御様子でした。

「母様御免なさい、私〇〇様のお倉の前で遊んで居
ましたの。」

弟と二人お傍へ駆け寄りますと、母様は兩手で
抱き締めて、はらくと涙をおこぼしになりました。

「まあ、この見の着物は直前だよ。」

はくと笑つて弟の着物を直しながら、

「でもよかつたね、二人が見えないで心配してゐる
と、誰かしらお前達二人がお山の方へ行く處を見た
つて聞いたものだから、母様は心配して、お山の狐
につれてかれたのぢやないかと思つたの、さあさお
家へお入り、母様がお雛様を飾つてあげますから、
その代りこれからお家ではつかり遊ぶんですよ。」

「え、決して外へは参りません、母様今日の事御免
なさいよ、ねえ。」

私はしみと後悔しました。

その後、伯母の病氣も幾らか快い方でしたが、そ
の年はとうとう摘草もおやめになりました。併し、
私はやさしい母の心盡しを心から喜んで、弟や友達
を相手に毎日幾段の前で遊びました。